

## ノダ相当形式にコピュラが現れにくい方言—福岡県福岡市方言—

江口 正（福岡大学）

### 0 はじめに

九州西部の肥筑方言はノダの「ノ」にあたる形式が「ト」あるいは「ツ」を使う地域である。福岡市方言は「ト」を使う地域であるが、他の肥筑方言と同様、ノダの「ダ」にあたるコピュラ（断定形式）を言い切りでは使うことができない。これは名詞述語文の非過去言い切り形でコピュラが生起できないという当該方言の制約によるものである。日本全国の方言におけるコピュラの生起について調査した白岩ら（2016:108）では、以下のように記されている。

- (1) 繫辞による文終止の頻度は近畿以東の方言では高いが、それより西では低くなる。特に肥筑方言では繫辞による文終止の例が見られない。

野田（1997）ではノダ文において「ノ」単独で終わる場合と「ノダ」で終わる場合とで用法が異なることが指摘された。本パネルセッションではその観察を方言に広げ、「把握用法におけるコピュラの必須性」と呼んでいる。福岡市方言は「ノダ」に直接対応する形式が存在しないため、この制約が働くかどうか、働いた場合どのように対応しているかが問題になる。第1節ではその点を扱う。

本方言でのノダ文の問題点はもう1つある。それは、名詞述語文でトをつかったノダ文を作ることが困難であるということである。第2節では文法体系に特定の品詞で「空き」があるということについて問題の整理を行う<sup>1</sup>。

### 1 把握用法とコピュラのない方言の関係について

野田（1997:68）はノとノダの使い分けについて、次のように述べている。

- (2) 対事的「のだ」は「の」「んです」といった形はとりにくい。「の」や「んです」は、聞き手が存在するときに、その聞き手を意識して選ばれる形である。「の」は、女性が同等か目下の聞き手と話すときに用いられ、「んです」は、男女ともに、目上の人やあまり親しくない聞き手に話すときに用いられる。対事的「のだ」は聞き手の存在を前提とせずに用いられるので、このような聞き手を意識した形はとらない。

共通語の「の」で終わる文は福岡市方言のトで終止する文と形式的に対応する。「聞き手を意識した」とは本パネルセッションの例文でいえば「提示」の文である。福岡市方言で提

<sup>1</sup> 本発表のデータは65歳の福岡市方言話者への対面調査と、学生およびその親世代へのアンケート調査のデータをもとにしている。

示用法は、ト終止用法で表現できる<sup>2</sup>。

(3) 私、明日は来ないよ。(「なんで?」) ちょっと用事が[アルト]。(あるんだ (よ)) 24

(4) (「昨日、どうして来なかつたの?」) 用事が[アッタト]。(あつたんだ (よ)) 25

(5) (「花子はどうしたの?」)

あれ、いないね。あ、そうだ。思い出した。花子は買い物に[イットート]

(行っているんだよ)。29

また、聞き手に問いかける疑問文もト終止の典型的な例である。

(6) (担当者が1人来ることになつていて) 今日は誰が[クルト]? (来るの) 8

(7) 雨が降ったから[オクレタト]? (遅れたの) 11

なお、福岡市方言の単独のトは共通語のノ単独終止とは違って女性的なニュアンスはなく、また非丁寧であるという以上のぞんざいさもない。

一方、「把握」の文は「ト」終止では不自然である。終助詞（以下では「タイ」）を補うことで自然になる。

(8) (独り言で) あれ、花子がいないなあ。たぶん買い物に{\*イットート／イットッタイ}。  
(行ってるんだ) 32

(9) (独り言で) あれ、花子がいない。あ、そうだった。思い出した。

花子は買い物に[イットート／イットッタイ]。(行ってるんだ) 33

(10) (友達の本棚を見て独り言で)

こんなにたくさん本が[\*アルト／アルッタイ。] (あるんだ) 36

(11) (テレビがつかない原因を探していて、独り言で)

あ、コンセントが[\*ヌケトッタト／ヌケトッタッタイ] (抜けていたんだ) 40

(12) (友達とテレビがつかない原因を探していて)

あ、わかった。コンセントが[\*ヌケトッタト／ヌケトッタッタイ] 41

平塚(2024)は、トとトタイ(ッタイ)の使用実態を調査し、若年層では対事的ムード(把握)ではタイの使用が義務的になりつつあると指摘している。

本パネルセッションでは「把握用法におけるコピュラの必須性」に注目している。上記の現象を見ると、コピュラが存在しない福岡市方言ではコピュラではなく終助詞が必要になる条件と見ることができる。ただし、本方言のノダ文に対応する表現では、タイだけでなく他の終助詞が必要になることがある。特にタイは疑問文では用いられないため、自問の文で

---

<sup>2</sup> 例文の最後にある番号は、野田発表の例文番号である。

はタイ以外の終助詞類が用いられる。

(13) (独り言で) どうしてそんなことを したんだ

[\*シタト/\*シタッタイ／シタトカ (イナ) ]

先に挙げた (1) ~ (5) のト終止の文には、終助詞の意味的性質は加わるもの、タイを付加することが可能である。しかし (6) (7) は疑問文であるため、タイは付加できず、終助詞を付加するとしたら疑問「ヤ・ネ・カ・カイナ」などになる。

また、終助詞ヤンが把握の文で用いられることがある。タイ・ヤンともに終助詞であり、それぞれのニュアンスは異なる。

(14) (テレビがつかない原因を探していて、独り言で)

あ、コンセントが[ヌケトッタッチャン] (ッチャン=ト+ヤン) 40

以上のように、福岡市方言では把握用法で必須になるのはコピュラではなく、文脈に合った終助詞である。つまり、[準体助詞 vs 準体助詞+コピュラ]という対立だけでなく、広く[準体助詞 vs 準体助詞+終助詞等有標形式]という対立軸で考える必要があることになる<sup>3</sup>。

ここで問題になるのは、共通語のノ終止文と本方言のト終止文の文法上の位置づけの違いである。本方言のト終止文は、コピュラあるいは終助詞がない形式が無標である。一方、共通語のノ終止文は通常コピュラで終止する名詞述語文にコピュラが付いていない形式であり、普通の文終止の形とは異なる有標な形式といえる。女性的な表現になっているのもその有標性が関わっていると思われる。有標・無標という見方で共通語のノ vs ノダの対立を考えると、ノ終止文は有標な形式であるため用法の幅が狭く、ノダ終止文のほうが無標な形式であるため用法の幅が広いと見ることは不自然ではない。しかし福岡市方言ではト終止が無標であるにもかかわらず、用法の幅では共通語のノ終止と同様に狭くなっている。このことについては有標・無標の説明法では説明できない。もし仮に「把握用法におけるコピュラの必須性」が多くの方言に見られる制約であるのなら、それをどう説明するのかという点が問題になるが、それが問題になるとき、福岡市方言のようなト終止が無標な方言の存在は無視できないものである。この問題については今後さらに研究を進める必要がある。

## 2. 名詞述語ノダ文の不存在について

共通語における名詞述語のノダ文は以下のような形式になっている。

(15) 学生①+な②+の③+だ④

前節では福岡市方言のノダ文におけるコピュラ④の不在と、それに関係する用法上の制約を扱った。本節では①の名詞と③の準体助詞の間に入る連体形②が存在しない点を扱う。

---

<sup>3</sup> 江口 (2017) でも同様の観察を行った。

これも肥筑方言に広く見られる制約であり、方言文法研究会編の『全国方言文法辞典資料集』では長崎県佐世保市宇久町方言、佐賀県武雄市北方方言、福岡県柳川市方言、長崎県雲仙市南串山町鬼池方言でいずれも名詞述語の「のだ形」について、該当する形はないとされている。同資料集で福岡市方言については以下のような記述がある。

- (16) 伝統的な福岡市方言では、名詞はのだ形をもたない。しかしながら、中年層以下では名詞に直接準体助詞「ト」のついた「学生ト」などが用いられ、のだ形をもつようになっている。これは60代以上の話者ではほとんど聞かれることははない。(平塚(2014:134))

「のだ形をもたない」というのは、名詞にトをつなげる連体形②のような形式もなく、60代以上では直接つなげることもできないということである。福岡市の60代以上の伝統方言話者には名詞述語のノダ文は存在しないことになるが、これは体系に一部「抜け」があることになる。これは他の肥筑方言でも同様である。名詞述語文に見られるこの「抜け」はどう考えればよいだろうか。

名詞述語文に関して、坪内(1995)が挙げた終助詞ヤンの例を以下に挙げる。(p.27)

- (17) あ、わかった。太郎は学生ヤン！（気づき）

これは本パネルセッションの「把握」の用法に入れられるものである。この例は「太郎は学生なんだ」と非常に近い関係にあるため、名詞述語ノダ文が「名詞+終助詞」で代替できる可能性があることを示している。そこで、いくつかの名詞述語ノダ文を終助詞付きの文で表現できるか確認する<sup>4</sup>。

- (18) あの人、誰なの？ ≒ 誰 {の／や／ネ／ナ} ? 17

- (19) (「ここには誰もいないよ」と言われて)

ふーん、空き家なんだ ≒ 空き家 {カ／ネ} 34

- (20) (建物も庭も荒れた様子の家を見て) たぶん空き家なんだ。 空き家 {タイ／ヤン}

- (21) 私、明日は来ないよ。(「なんで？」) 歯医者なんだ (よ)。

≒ 歯医者 {タイ／ヤン} (24を名詞文に)

- (22) 実は私、学生なんだ。 ≒ 学生 {タイ／ヤン}

終助詞の違いによるニュアンスの違いはあるものの、断定的文であればタイ・ヤン、問い合わせ疑問文であればヤ・ネ・ナ、納得や疑惑の文であればカを使うことでほぼモダリティのノ

<sup>4</sup> 平塚雄亮(2024)が指摘するように名詞に直接終助詞が続くのは伝統方言形である。

ダ文に対応する名詞述語文になるように思われる。

しかし全てのノダ文が名詞+終助詞で表せるわけではない。どうしても表現できないのは、述語以外に焦点があるスコープのノダ文である。

(23) どうしてあの人はまだ平社員なんだ。 ≠ 平社員 {ヤン／タイ／カ}

(24) あの人が問題なのではない。 ≠ 問題 {ヤナイ／ヤナカ}

これらは統語論的にノダ文にする必要があるものであるが、終助詞による意味的 operationだけでは作れないようである。モダリティの名詞述語ノダ文は終助詞を使って代替できるが、スコープのノダ文は準体助詞を使わず名詞述語のまま文を作ろうとする限り対応することができないことになる。

このように見えてくると、名詞述語ノダ文が作れないことは体系全体に関わるような問題というより、特定の文パターンにおいてだけ問題になることがわかる。

### 3. まとめ

福岡市方言の準体助詞トを使ったノダ文にはコピュラが生起できない。本発表ではそのことと「把握用法におけるコピュラの必須性」との関係を確認し、コピュラでなく終助詞が対応していることを示した。また、名詞述語のノダ文が文法的に作れない仕組みであることについて確認したが、モダリティのノダについては終助詞で対応していることを示した。これらの観察は、伝統的方言ではノダ文（ト文）において終助詞が重要な働きを持っていたことを示している。平塚（2024）のいうように終助詞の働きが弱くなってきた福岡市方言は伝統方言とどれくらいシステム上の違いがあるか、丁寧に観察していく必要がある。

### 参照文献

- 江口正（2017）「準体形式・断定辞の機能と条件文」有田節子編『日本語条件文の諸相—地理的変異と歴史的変遷—』 pp.33-58. くろしお出版
- 白岩広之・平塚雄亮・酒井雅史（2016）「繋辞生起の方言差」『日本語文法』16(2) pp. 94-10.
- 坪内佐智世（1995）「福岡市博多方言における「だ」相当助詞に現れるモダリティ」『KLS』15, pp. 25-35. 関西言語学会
- 野田春美（1997）『「の（だ）」の機能』くろしお出版
- 平塚雄亮（2014）「福岡県福岡市方言」方言文法研究会編『全国方言文法辞典資料集(2) 活用体系』, pp.125-134.
- 平塚雄亮（2019）「福岡市方言の準体助詞にみられる言語変化」『中京大学文学会論叢』5, pp.71-88.
- 平塚雄亮（2024）「方言の言語変化と維持—福岡市方言の終助詞タイを例に—」『方言の研究』10, pp.53-72, 日本方言研究会